



戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

—「用語編」その7

原田 広 (非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

本センター紙芝居コレクションの脚本用語から国策紙芝居の戦時下の特性を解明することを目的として『ニューズレター』No.31 から開始した本稿連載も、今号より扱う用語パート [国内社会：13/ 宗教、民俗、14/ 国史、15/ 国体明徴、日本精神] を以て完結することになる。本パートは、分類の順番を踏襲すれば連載第3回目に取り上げるべきであったが、ここに採録した用語群の分析が戦時下紙芝居における核心的課題になると考えられたため、紹介の順番を変更したものである。

“戦時下紙芝居における核心的課題”であるとは、端的にいうと、これらの用語が戦時下の国民感情・国民心理を最深部において規定した近代日本の天皇(制)に関わっているからに他ならない。本稿が依拠する国策紙芝居の脚本が、汗牛充棟の研究が蓄積されてきた近代天皇(制)の歴史的・思想的背景や課題に対して、過不足なき応答性を有しているかどうかは自ずと別問題である。しかし、分類 [13/ 宗教、民俗] は我が国の民俗的な信仰心に根差す天皇(制)の支持軸であり、また [14/ 国史] は近代以前の日本史に題材を採った天皇(制)に帰一する物語構成として定着してきたものであった。そして [15/ 国体明徴、日本精神] とは、美濃部天皇機関説事件を機に沸き起こった国体明徴運動に象徴される昭和戦前期の神格的天皇(制)崇拝の代名詞である。これら我が国古代からの民間信仰、極端な作為を以て再構成された歴史物語り、昭和戦前期における大東亜戦争への動員思想に収斂された国粹的イデオロギーが、戦時下紙芝居における背景音として流れていることを(その応答性の深淺を含めて)読み取ることができるはずである。

まずは今号で分類 [13/ 宗教、民俗] を取り上げ、次号以降、[14/ 国史] および [15/ 国体明徴、日本精神] に採録した用語を紹介していきたい。以下、前号までと同様、文中に「カギカッコ」で引用する紙芝居脚本はイタリック体・現代仮名遣いに改め、採録用語は太字とし、出現回数の引用符〈3回以上〉〈3回未満〉は省略する。

13/ 国内社会：宗教、民俗

日本固有の民族宗教である「神道」の定義は簡単でないが、確定した創始者(教祖)と正典(教義)に対する厳格な信仰・入信儀礼を伴う世界宗教とは異なる日本独自の伝統文化として受け止められているであろう。GHQの神道指令によって「国家神道」が解体された戦後の現在にあっても、日本人にとって「神道」文化は初詣・お盆行事・彼岸の墓参などの年中行事や結婚式・地鎮祭などとして維持され、その宗教性を問われれば、廃

れたとはいえ家の先祖や村の鎮守への崇敬心が、あるいは神社空間(玉砂利や森、伝統建築)の演出する自然美・生命観が幾分かの共感を以て語られる。こうした崇敬・共感の想いは、“八月十五日”という一年の正午に抱かれ続けてきた自民族中心主義の歴史に対する留保と大きな矛盾なく同居させられている。

開国・維新期からほぼ70年後に当たる戦時下紙芝居から、日本特有の[宗教・民俗]性を表現する用語として下記8件の用語を採録したが、採録基準として本カテゴリーを設定した作業当初の予期に反して、件数は決して多いとはいえない。すでにそのこと自体、紙芝居という大衆的メディアが[宗教、民俗]の基底部を表現することが困難となっていた総力戦の時代(装備の革新と組織の合理性を求めた軍隊は「近代化」の枢要な担い手であった!)を物語っているかもしれない。以下、採録件数の降・昇順にこだわらず、類似用語を集約しながら脚本用例を紹介したい。

鎮守様、氏神様、産土の宮、山神様、神社(各種)
13、靖国(の神、神社)、招魂社12、八幡大菩薩(八幡宮)6、伊勢神宮(皇大神宮)4、お守り、千人針4、官幣神社2、浄波瑠の鏡1、観音様1、教会1

①鎮守様、氏神様、産土の宮、山神様

まずは、大半の日本軍兵士の出生地であった地方の〈鎮守様、氏神様、産土の宮、山神様〉が、祖先神に対する戦勝・武運長久の祈願の場として、あるいは地域共同体の団結を誓う場として登場する。

『戦士の母』1941.6は、現千葉県東金市近郊を舞台とした、父が日露戦争で病死し、妻も3年前に病死、子供3人を抱える在郷軍人の男と60歳になる母の物語である。1937年盧溝橋事件が戦線拡大した2カ月後「召集令状を持って来られる町役場の人は即ち天子様のお使い」と居住まいを正して迎える母。出征の日となり「鎮守様にも祈願を込めいよいよ入隊のため日向駅(注：千葉県)に向かう」「その次の朝から……そっと家を抜け出して氏神様へ日参し我が子の武運長久を祈り、戦線から送られてきたお金を愛国貯金する日本の母が描かれている。/『みのる秋』1941.11は、茨城県霞ヶ浦湖畔の小部落を背景とする。工場で働く父は食糧増産のための隣組の野良仕事に動員されることに協力せず、父に代わってその息子が「部落の農民一同、鎮守様の御前で食糧増産祈願の祭典」に参加し、「朝夕食糧増産を祈念するようにと神主さんの手から渡された氏神様のおふだ」を祀るための神棚を作る。村人の共同作業で息子が田植えを終えた水田を見つめ、隣組に非協力的だった父



図① 『戦士の母』



図③ 『軍神岩佐中佐』



図② 『みる秋』



図④ 『闘ふ母』

も改心し、「秋晴れの日、遠く鎮守の杜では豊年満作を祝う太鼓の音が打ち鳴らされ」、一家は自宅の神棚の前で皇軍の武運長久と職域奉公を誓う。／『軍神岩佐中佐』1943.6は、1941年12月ハワイ真珠湾攻撃の潜水艦特別攻撃隊で戦死した九軍神の一人・岩佐直治中佐の物語。前橋中学から海軍兵学校へ進み、1938年卒業後、「休暇に故郷へ帰るたび第一に詣でるのは産土の宮」と、いずれ訪れる父母と故郷との離別を暗示する。1942年4月日比谷公園での海軍葬と見覚えのある鄙びた村社との落差が印象的に描かれている。／『闘ふ母』1943.7は、父の炭鉱事故死で得られた何某かのお金を子どもの教育資金に貯え、夫と同じ鑛山（やま）に戻って厳しい労働に勤しむ母親と、少年たちの憧れであった予科練を志願・一等航空兵となって出征する長男との心の交流を描く。出征前に帰省した長男は「山神様の前に膝をついて合掌する母の姿、その尊い後姿に言葉ををかけることも忘れて心の中で手を合わせ」、1941年12月8日、南進基地を発って英国東洋艦隊を攻撃する長男の目に「照準望遠鏡の中にあの鑛山の山神様におまいりする母の後姿がありありと見えた」と、母と子を結び付ける象徴として寒村の小祠が描かれる。

もともと〈氏神〉は古代の豪族・氏人たちが祀った祖先神であり、〈鎮守〉神はその土地やその土地の者を守る神、そして〈産土神〉はその人間が産まれた土地の神でその者を一生守護すると考えられてきた。しかし歴史的に、同じ土地に住み人の移動が少なかった時代には多

くの場合〈鎮守〉と〈産土神〉は同じ神であり、室町時代の荘園制崩壊とともに〈鎮守〉信仰は衰退して〈氏神〉に合祀された。さらに都市化に伴い血縁を基にした〈氏神〉信仰は衰えていき、地縁による信仰意識を基にした〈産土神〉信仰に吸収され、現在も「初宮参り」「七五三」「成年式」等の風習として定着している。一方、〈山神（山の神）〉は本来猟師・木樵・炭焼きなど山民の守護神であるが、日本の鉱山においても安全と繁栄を祈願して祀られてきた。こうしたことから、炭鉱町を背景にした上記『闘ふ母』における〈山神〉の登場には固有の信仰上の必然性が認められる。しかし、これ以外の3作品においては、同一作品内での信仰神の重複にも見られるように、〈鎮守様／氏神様／産土の宮〉の本来の区別は消失しているといってもよい。共通するのは、登場人物の生まれた地域に残存する民俗的信仰の場と、戦時下という危機的状況における戦勝・武運長久・職域奉公の祈願である。出征に際しての定型的祈願、隣組の食糧増産祈願には地域の強制的儀式的色も濃い。

しかし、たとえば民俗学者・柳田國男の「神道私見」（1918年1-2月）に次のような一節があることを思い起こしてみたい。「日露戦役の当時勝敗の予測はいまだつかず、多くの若者を戦場に送り出した村々では、その不安の念を散ずる道が他になくしてもっぱら氏神の方に向い、いわゆる敵国降伏の祈禱というものはいくつかの鎮守社頭において行われ、軍長その他勤勉なる官公吏は率先してこれに臨席し、大いに人心を鼓舞しました。また



一方には慈母貞婦の類は水垢離を取り、五百度を踏んだというような例はたくさんございまして、その信仰行為はこれを戦時の善行美跡の中に数えていたのであります」（『柳田國男全集 13』ちくま学芸文庫 1990.4.24、p588）。これは、「神社は人（祖先または偉人）を祭るとする神社当局の解釈」や「内務省の見解に関わらず神社の崇敬は宗教であるか否かという大問題を未解決のまま放置している日本」に対して日本人固有の祖霊信仰を重んじる柳田の反論的文脈の一節であるが、紙芝居作品中の戦地の我が子の無事を願う母の祈りには、明治以降、日清・日露に続く巨大な近代戦に兵士を送り出した無名の民衆の姿が、これが書かれた約 30 年後にほぼ変わらない姿で投影されているだろう。国家的に造営された「神社」や教義としての「神道」以前の信仰の原質もまた遠く垣間見えるように思われる。

一方で、こうした地縁的な〈鎮守〉〈氏神〉〈産土神〉も、〈伊勢神宮〉を頂点とする維新政府の神道国教化政策のもとで一村一社を基本に中央集権的に再編され、個々の歴史的伝統や性格にかかわらず一括して「神社」と称されることになる。寺請制度に代わる 1871（明治 4）年の氏子制度はわずか 2 年あまりで廃止されたが、作品『みのる秋』に出てくる「*神主さんの手から渡された氏神様のおふだ*」を祀る神棚は、神官から授けられた“明治の宗門改め”証明ともいべき守り札の安置場所の名残を留めているだろう。しかし、1889（明治 22）年の新しい市制町村制度（いわゆる「明治の大合併」）による自然村の減少、1906（明治 39）年神社合祀令による村社の整理は、地域と密着した民俗信仰の質を確実に変えていった。こうした民俗宗教の“近代化”は、日清戦争（1894-95）・日露戦争（1904-05）という対外戦争による近代日本の国際的地位の獲得と並行して行われていった。その約 30 年後に我が国が日中戦争に突入すると、早くも 1938 年に隅田川の花火大会、弘前ねぶたまつりが中止される（祇園祭の山鉾巡行は 1943 年に、弘前公園の観桜会は本土空襲の激化とともに 1944 年に）など、地域に密着した各地の伝統的祭りの中にも国家的支配が及んでいった。こうした動きは、文部省によるすべての学徒体育大会の禁止（1943 年 9 月 24 日）など教育の場においても例外ではなかった。

②お守り、千人針、浄波瑠の鏡、観音様、教会

1873（明治 6）年 1 月に明治政府が徴兵令を制定すると、江戸時代の身分制社会のもとで「仁政は武家の務め、年貢は百姓の務め」（牧原憲夫『客分と国民のあいだ：近代民衆の政治意識』吉川弘文館 1998.7.20、p49）とされてきた民衆にとって、戦争動員への恐怖と一家の貴重な労働力を奪われることへの抵抗から、徴兵反対一揆（血税一揆）が各地で起こり、徴兵逃れの「兵隊養子」や「失踪人」も蔓延した。また徴兵制への恐怖と不安から、現役徴集の抽選からはずれること（徴兵除け）を祈る神仏信仰が流行した（大濱徹也『天皇の軍隊』講談社学術文庫 2015.6.10、p40-43）。日清・日露戦争から太平洋戦争へと多くの兵士が戦地に赴くようになると、徴兵除けの信仰は弾丸除けの信仰に転化していった。その一般的象徴となるのが、身近な神社仏閣か

らいただく護符〈お守り〉や、街頭や市場の道行く人々の手につくられた〈千人針〉であろう。



図⑤ 『お山の常會』

しかし、本紙芝居コレクションの脚本には、社寺の〈お守り〉を出征兵士の安全祈願とするものは登場しない。／『お山の常會』1944.4 で、山の動物たちが山の中の国民学校を卒業して町の飛行機工場へ出発する少年の壮行会を開き「*お守りにもって行って*」と渡すのは鷲の羽や熊・梟の毛である。ネイティブアメリカンのドリームキャッチャーを想起させるが、日本古来の矢羽根に珍重された鷲羽は、「山人」の国内モデルであるアイヌの主要な交易品であった。／『日本工員』1944.10 は、東條内閣の国務大臣等を歴任した製紙王・藤原銀次郎『工業日本精神』（日本評論社、1935）を原作とする。主人公の紙漉き技師が派遣先の米国で成功を収め「*帰国後家族に見せる お土産はアメリカにいた間肌身離さず抱きしめていた天照大神の御神守*」である。社長からの褒章の小切手を辞退する技師が日本工員の魂として見せるのは「*祖先が御維新前、横浜で外夷（けとう）を斬った刀*」である。／普通海員養成所を経て海員（輸送戦士）として働くようになる『海の男』1944.9 には、「*母が日本の海員として立派に働いてくれるようにとお祈りしてきたお守り*」とあるが、その由緒には一切触れるところがない。しかし、これら〈お守り〉を描く作品が何れも太平洋戦争も後半の 1944 年に創作されたものであることには目を向けておきたい。

また〈千人針〉は、上に〈鎮守様〉の項で紹介した『戦士の母』1941.6 に、「*（父が近く戦争に行くことを聞いて娘が）あたし千人針をつくるわお父さんに*」と登場するのみである。本作品以外で「針を使う女性」の姿が描かれるのは、『妻』1943.7 における婦人会での傷病兵のための白衣縫いの場面—「*傷痕の勇士よ、一日も早く癒えてと心に念じつつ真心こめて運ぶ一針一針*」があるだけである。こうした 1940 年代の紙芝居における民俗的・宗教的表象の意外な希少さには、金属と火薬によって牧歌性を奪われ、戦争の現実侵襲されていった銃後の姿を見るべきかもしれない。

同時に指摘すべきことは、日本人の「民俗・宗教」生活において無視できないはずであった仏教関連用語（その教理や布教の場面）が、戦時下紙芝居において表現さ

れることが極めて少ないことである。元寇を背景とした歴史物紙芝居以外で採録できたのは、『閻魔の廳』1944.12の「(閻魔)地獄三界にまで名の轟くルウ介・チヤア六・セウ吉の三悪党……こいつらの罪咎は毎日毎日浄波瑠の鏡に照らされていやというほど見て知っている」一閻魔が亡者を裁くとき善悪の見極めに使用するとされる浄波瑠鏡(じょうはりのかがみ)と、『明るい店』1943.12で「(闇取引をしている父をもつ息子が)観音様、僕のお父さんが早くお店に出て町内の人と一緒に働くようにしてください」一と、その境内が日頃の遊び場でもある町中の寺社に祈る場面の二つだけである。また、戦争敵国のキリスト教に関連する場面も、日本軍侵攻地にある教会のスパイと思わせる牧師との緊張感ある対峙を描く『父の手紙』1944.1-「支那といってもここは雪に閉ざされた何もないうところ、唯一アメリカ人のやっている教会だけが唯一の文化機関何なのだ」の一作のみである。



図⑥ 「閻魔の廳」

このような表現素材の採/否の偏差には、創作者意識における或る種明確な「分割線」(安丸良夫『神々の明治維新』岩波新書1979.11.20、p7)が影を落としているように思われる。その片側には、創唱(普遍)宗教に対する日本人の無関心・現世主義という被支配側の受容姿勢の問題があるだろう。しかし、もう一方側には、明治初期の廃仏毀釈(伝統的習俗や民衆宗教としての仏教の排斥)、そして臣民の聖典というべき明治中期の「教育勅語」渙発を経て形成された国家神道・絶対主義的天皇(制)イデオロギーによる公共空間の完全支配が、その分割線の濃化に大きく作用している。安丸良夫がいう「分割線」は、“国家によって権威づけられた特定の神々とそれ以外の多様な神仏”とのあいだに、また“近代日本の天皇制国家のために良民鍛冶の役割を担う各宗教と仏教の反世俗主義・来世主義、民俗的な旧慣・陋習・迷信・愚昧といった有害・無価値なもの”とのあいだに引かれた否定的線分であった(同、p7-9)。そして、理論や教義が大衆化される過程に不可避免的に忍び込む即物的理解は、近代的諸メディアに載せられる機会の増大とともに、伝承の拡散を伴いながら分割線を定着させ、情報(大衆的物語)のバイアスを生み出していく。国民全体が国家のために死を恐れずに戦う総力戦イデオロギーに収斂したこの時代、個人的な彼岸の救済を求める信

仰心を“敵”とする空気が支配する一方、しかし、寺社や学校は、国策紙芝居を地域の児童向けに演じる場として積極的に提供されもしたのである。こうした表現素材自体への禁忌と実演の主体・場との捻じれた関係性は、非常時に呼応した大衆メディアの創作拠点と社会的流通・普及の矛盾を象徴している。

③神社(各種)、別格官幣社

〈氏神〉等のアノニマスな民俗信仰の場や護符に加えて、戦時下紙芝居に登場する著名な歴史的神社についても、そうした分割線を認めることができよう。

『殊勲涙あり』1941.10は、日中戦争時に「撃墜王」と称された福岡県出身・古賀清澄航空少尉の物語(原作は吉村誠『殊勲涙あり』東亜公論社1940)である。帰省の折に、父親から「お前が戦地に行ってもまもなくお前が手柄を立てるよう親類や近所の人たちと高良神社へお参り」した時に弟が交通事故で死んだことを告げられ、それが1937年9月南京攻撃で危うく難を逃れた南京攻撃と同じ日であったことから自分の身代わりになった弟の運命を想う。《高良神社(大社)》は、福岡県久留米市(古代筑紫)の高良山に座する律令制下の『延喜式』神名帳に記載された「式内社」である。隣組の日掛貯金を主題とした『尊き一銭』1941.12に出てくるのは、「隣組一同は本居神社に参詣し貯蓄報国の誓いを新たにしました」と、三重県松阪出身の国学者・本居宣長を神として祀る神社である。実在した偉人を祀る神社には武士や軍人が多いなか、学問の神様・菅原道真(天神、天満宮)に連なる文人を祭神とする。1875年山室山神社として創建、1903年「県社」に昇格、1931年《本居神社》に改称した後、1995年社号を本居宣長ノ宮に改称している。隣に松阪の産土神・松阪神社がある。歴史物紙芝居としては、『上杉鷹山公』1942.10に「治憲公は新しい藩政に対して民の声を聴かんとして重大局面に天地神明に縋らんと春日神社に赴かれ」と、上杉氏の会津藩・米沢藩転封に伴って移転した神社が登場する。『山田長政』1943.06に「思えば駿府表の浅間神社に誓いをかけた外国行き」と描かれるのは、海外雄飛の伝説で有名な山田長政の産土神である。九州・肥後菊池郡(熊本県菊池市)を本拠とする菊池氏の南北朝時代の活躍を描く『純忠菊池一族』1944.8に「阿蘇神社の神前に戦勝を祈願する菊池武時」として登場するのは、肥後国一宮として崇敬を受けた由緒ある神社である(2016年4月熊本地震で被災)。

また『純忠菊池一族』には、「(菊池武時が)別格官幣社菊池神社に護国の神と祀られ」る歴史も描かれる。ここにいう《官幣社》とは、古代律令制のもとで官(朝廷・国)から幣帛ないし幣帛料を支弁される神社であり、遠方の神社では上京が困難なため国司から幣帛を受ける国幣社と区別されていた。《官幣社》は畿内に集中しているが遠方でも重要な神社は官幣社となっていた。近代社格制度では、官社・諸社(民社)・無格社に分けられるが、1872(明治5)年に建武の中興の忠臣・楠木正成を主祭神とする湊川神社が初の《別格官幣社》に列格される。《別格官幣社》は、大化の改新の功労者、道鏡の皇位篡奪を防いだ忠臣、後醍醐の南朝に殉じた武将、



図⑦ 「純忠菊池一族」

朝廷の権威を再興した近世の統一政権者たちを、あたかも天皇の臣下として網羅的に配祀することにより、近代国家の出発点にあって天皇（制）への忠誠を究極的価値基準に置く国民教化のために創建された神社であった。日光東照宮（徳川家康、1873年）、豊国神社（豊臣秀吉、1873年）、談山神社（藤原鎌足、1874年）、護王神社（和氣清麻呂、1874年）、建勲神社（織田信長、1875年）、藤島神社（新田義貞、1876年）、照国神社（島津斉彬、1882年）、四條畷神社（楠木正行、1890年）、上杉神社（上杉謙信、1902年）など、それぞれの主祭神と鎮座年が、創建の意図を明確に物語っているであろう。これらの神社は、紙芝居脚本にも、『楠木正行』1941.9「別格官幣社四條畷神社、正行の魂は今もなおここに」、『和氣清磨公』1942.3「（清磨の）忠魂は西は別格官幣社護王神社として祀られ」として登場する。現在も文武の忠臣の象徴として和氣清麻呂像（平川門付近・1940年設置）・楠木正成像（二重橋付近・1896年設置）の2体の銅像が皇居を守護するかのように残されている。なお、戊辰戦争以後の戦争で国（朝廷・天皇）のために命を落とした集合的魂（英霊）を祀る〈靖国神社〉もまた《別格官幣社》である（後述）。



図⑧ 「少年團」

さらに、明治天皇と昭憲皇太后を祭神として1920（大正9）年11月2日に鎮座された新しい《官幣大社》が『少年團』1942.1に登場する。「昭和16年1月

16日大日本青少年団が生まれ本部は東京の明治外苑にあります」「去年の末の22日日本中の青少年の代表が東京に集まり……全国青少年を代表して明治神宮、靖国神社の参拝、市内行進、陸海軍省の訪問など力強い一日でした」。《明治神宮》の創建と並行して、明治時代に宮内省が所轄した南豊島御料地（代々木御苑）に明治神宮御苑（通称・神宮御苑）が、また青山練兵場の跡地に明治神宮外苑（通称・神宮外苑）が整備されている。大日本青少年団の本部は《明治神宮外苑》の日本青年館に置かれたことから、毎月22日に定例化された青少年常会の日で開催した全国集会の模様とともに、神宮等施設が完成後20年を経たばかりの首都の新たなランドマークとして描き出されているのである。兵役法による徴兵猶予の対象であった学生を在学途中で徴兵・出征させた第1回学徒出陣（1943年10月21日）がこの場所で行われたことは、その雨中行進の映像・陸軍分列行進曲（抜刀隊）とともに余りにも有名・悲惨な太平洋戦争末期の国民的記憶となっている。大日本青年団・大日本連合女子青年団・大日本少年団連盟・帝国少年団協会の四団体を文部大臣（当時橋田邦彦）のもとに統合した大日本青少年団は、翌1942年には大政翼賛会の傘下に組み込まれ、そして1945年には大政翼賛会の解散に伴い国民義勇隊として再編されていった。

④伊勢神宮（皇大神宮）、八幡大菩薩（八幡宮）

上に紹介した神社（各種）は、物語の主人公や地域を由緒づけるための“単発的”登場であったが、複数の作品に描かれているのは〈伊勢神宮〉および〈八幡宮〉である。いうまでもなく、〈伊勢神宮〉と京都の〈石清水八幡宮〉は、皇室が先祖に対して祭祀を行う二つの廟という意味で中世以来「二所宗廟」と称される別格の神社である。

●伊勢神宮（皇大神宮）

『オコメ』1941.9は、国民学校に通う少女が「今日十月十七日は神嘗祭、今年とれた米で伊勢の皇太宮へお供えする日」に祖母が住む田舎でコメの収穫を体験する物語。神嘗祭はその年の初穂をアマテラスに奉納する宮中祭祀であり、国民の休日とされていた。この他にも戦前の祝日の多くは、皇室祭祀令に対応した祭日祝日法令によるものである。／『野口英世』1941.12には、16年振りに帰国した主人公が「（大正四年十月初旬、年老いた母を負い）伊勢の皇太宮へお参り」と、やはり日本人が記念すべき何らかの機会に必ず参詣する場所として登場する。以下の2作品は、1281（弘安4）年の二度目の蒙古襲来に題材を採る。／『物語愛國百人一首』1943.8では、「勅使として皇太宮神宮の御前に祈願を籠めた」鎌倉中期の歌人・藤原為氏が元寇との戦いに勝利して詠んだ歌を紹介する。『愛國百人一首』は、戦時中の翼賛運動のひとつとして日本文学報国会の編集で1943年3月に毎日新聞社から刊行され、多くの注釈書や子供向けカルタなどが製作された。／『敵国降伏（かうぶく）』1944.8は、「（亀山上皇が）神国の歴史を汚さる事は皇祖に対し申訳けなしと伊勢皇太宮神宮に御身をもって国難に代らんとまでお祈り遊ばされ」、「神々の心のままに」吹く神風によって敵国を撃退した歴史物語である。

アマテラスを主祭神とする天皇家第一の宗廟の脚本描

写は、維新以降の国民教化によって画一化せられた宗教的態度において無惨とっていいくらい低調かつ凡庸に見える。しかし、地名・伊勢に冠される枕詞であった「神風」は、蒙古軍の兵船が二度まで偶然の大風で壊滅した（異国降服！）と信じられたことにより、「粟散辺土の小国」という仏教的な須弥山的世界観を覆し、“日本は神々によって特別に守護されている”という「神国」観念を流布させる象徴的契機となった。

●八幡大菩薩（八幡宮）

〈八幡神（八幡大菩薩）〉を祀る神社は、八幡三神（応神天皇、比売大神、神功皇后）を祀る宇佐八幡宮・石清水八幡宮・宮崎宮（または鶴岡八幡宮）の日本三大八幡宮に代表されるが、全国に所在する〈八幡宮〉—八幡神社・八幡社・八幡さま・若宮神社—と呼ばれる神社は、今も1万社とも2万社を数えるとも（さらには4万とも）いわれる。

まず、『父』1942.8に描かれるのは、印刷の仕事で目を悪くした父親が「町の片ほとりの八幡宮に一日も欠かさず詣で」出征する我が子に「わしはな八幡様に願をかけたのだ、英米との国を挙げての戦争、手柄を立てないうちに怪我や病気をしないように」と語りかける場面である。このような無名の地域神に〈八幡神〉を勧請した例と違い、以下の3作は、古代の航海民・宇佐氏の氏神でもあった海の神としての〈八幡神〉を描くものである。／『南海の俠兒』1941.12において、「嵐の中に八幡大菩薩の旗はちぎれるばかりにはためく」のは、台湾（高砂島）を自国領と主張するオランダとの交渉に当たる高田弥兵衛が乗船する和船（八幡船）である。長崎の一貿易商人・高田は、「慶長年間に日本人の南進の道」を開いた先駆者とされる。／『海國の民』1942.7は、神功皇后の新羅征伐、元寇の戦い、秀吉の朝鮮出兵と“海国日本の輝かしい歴史”を謳い、「（室町に入って）八幡大菩薩の旗印を風になびかせた八幡船は……国民の雄々しい心を振り起こさせるのに役立った」と描く。その後「徳川の鎖国政策は海洋発展を押し止め」たが、太平洋戦争の最中の現在を「大東亜海はは我らが内海」と訴えることに本作品の目的は定められているだろう。／『八幡船』1944.12は、江戸時代初期に徳川家康に外交顧問として仕えた英国人航海士ウィリアム・アダムス（三浦按針）、蘭人ヤン・ヨーステンの名を挙げながら、「ソイン船とは支那人や紅毛人が申す呼び名で正しくは八幡船という」、「その起源は元寇の復讐で元に出征したことに端を発し、八幡船の目的は海外貿易、日本を侵略せんとするえびす共を南の海で防ぎとめる」ことにあるとして、当時の東南アジア方面での朱印船貿易に絡む諸外国商船との軋轢と太平洋を巡る戦時下の現在を二重写しに描き出す。

以下の2作は、創建時の古代と軍神崇拝が拡がる中世武家の時代に遡る。／宇佐八幡宮神託事件に題材を採る『和氣清磨公』1942.3では、父・聖武天皇の志を継ぎ菩薩国家（仏教政治）の道を目指した称徳天皇（孝謙天皇）が僧・道鏡を天皇の地位に即けようとし、夢告に現れた八幡神の宣託を聞くために和氣清磨を宇佐八幡に遣わす。「身を清め心を清めて八幡宮の神前に額づ」く清磨が聞く神のお告げは「我国は国の初めから君と臣の別が明らかに決まっている。天皇の御位には必ず天皇のお血筋の方を立てられよ（天つ日嗣は皇籍を以てせよ）」



図9 「海國の民」

であり、怒った道鏡は清磨を大隅（鹿児島）に流刑するが、神の加護によって助かり、清磨の天皇家への忠魂は《別格官幣社》護王神社として祀られる。／『新田義貞』1942.12では、後醍醐天皇の鎌倉平定のため北条高時と戦う新田軍の拳兵に続々と集まる越後の援軍の模様が「さてさて不思議なこともあるもの、これこそ全く八幡大菩薩の御まもりがちがいない」と描かれる。作品冒頭で新田家の祖先とされる清和天皇の嫡流・源氏一門は、八幡大神を氏神として尊崇し、鎌倉初代将軍源頼朝ゆかりの鶴岡八幡宮など、全国各地に八幡大神を勧請した神社が創建された。

〈八幡宮〉は、その謎多き伝説も相俟って、武運長久・厄除け・家運隆昌・子孫繁栄など、武神としての顔から生活守護まで多様な顔を見せるが、戦時下紙芝居が描くのは、国家鎮護の神あるいは武神としての〈八幡神〉であった。その一方、〈八幡神宮〉と並んで全国的な分布を示す熊野神社・天満神宮・稲荷神社が（少なくとも本学コレクションを見る限り）紙芝居作品のなかに一つも登場しない理由も重要な考察対象と考えられる。『餅的』1941.11という作品に描かれた物語—豊後に移り住んだある農民が富裕に驕って餅を得意の弓矢の的にしたところ、その餅が白い鳥に化して山頂へ飛び去る。貧窮を悔いて改心すると一年後白鳥が戻って来る—は、伊奈利社（稲荷社）の縁起といわれるが、作品中には稲荷の用語は出てこない。“描かれなかった”それぞれの神社に潜む神仏習合、御霊信仰、渡来系の氏神といった素性が、如何なる経路で創作に作用しているかを詳かにする用意を筆者は持たないが、逆に“描かれた”人物像に着目すると、古来、ある意図を以て再生産されてきた仏教文学、説話文学や語り物・史論（日本靈異記、今昔物語、太平記、日本外史など）によって広く巷間に浸透していた歴史雑話のさらなる反復が、戦時下紙芝居において行われていることだけは指摘されよう。

⑤靖国（の神、神社）、招魂社、英霊（英魂）、忠霊、護国の神（華、鬼、英霊）

「民俗・宗教」の最後に取り上げねばならないのは、紙芝居脚本における頻出度としても上位に位置する〈靖国神社〉である。これが維新政府によって《別格官幣社》として創建されたことは既述したが、その起源は1862



(文久2)年12月に京都東山で行われた勤王の志士たちによる尊攘派同志の招魂祭である。その後、大政奉還・王政復古の号令・江戸城無血開城と続く動乱のなかで、旧幕府勢力と戦った殉難者の慰霊は新政府の中枢者にとって重要な課題となっていた。明治政府は、殉難志士を祀る「(後の)京都霊山護国神社」創建の布告に先立って、戊辰戦争未だ最中の1868(慶応4)年6月江戸城西の丸大広間で東征軍戦没者慰霊祭を行い、遷都を強行したばかりの新首都・東京に軍務省管轄の「招魂社」を1869(明治2)年に建立することを決定した。候補地は、上野寛永寺の社地を主張した木戸孝允に対して、上野戦争の司令官であった大村益次郎が幕府軍亡魂の地・上野に招魂社を建てることは不適切と主張し、九段の元歩兵屯地跡に決定した。それから一月足らずの工事で同年6月「東京招魂社」が建設、1872(明治5)年5月本殿が造営され、戊辰戦争戦没者3588柱が合祀されたのを初めとして、1875(明治8)年には京都東山や全国各地の招魂社に祀られていた戊辰戦争以前の国事殉難者が東京招魂社に合祀された。さらに、初の対外戦争であった台湾出兵戦死者の慰霊(1875年2月)、最後の土族反乱となった西南戦争戦没者の合祀臨時大祭(1877年11月)を行うことによって、東京招魂社は幕末のペリー来航から明治維新にかけての国事殉難者・戦没者のみならず、対外戦争での戦没者をも祀る国家的護国の社という位置を占めるようになる。東京招魂社が1879(明治12)年6月に〈別格官幣神社靖国神社〉としての社格を得るのは、すでに徴兵制の施行(1873年)によって近代の国軍の体制を整えた陸軍の顕彰圧力によるものであり、当初は内務・陸軍・海軍の共同管理下であったが、1887(明治20)年3月には陸軍省・海軍省管轄に変更され内務省が外される。靖国神社は、1882(明治15)年1月4日「軍人勅諭」の下賜から、1889(明治22)年2月11日「大日本帝国憲法」公布、1890(明治23)年10月30日「教育勅語」渙発という近代国家形成のエポックと並行して、名実ともに“宗教的軍事施設”となったのである。「神社非宗教論」による信仰の自由を定めた帝国憲法のもとで“宗教ではない”〈靖国神社〉の宮司は陸軍の退役将官に限られていた。本稿では、この“宗教的軍事施設”としての〈靖国神社〉とともに、ここに合祀された〈英霊(英魂)〉、〈忠



図10 「兵制の父大村益次郎」

霊、護国の神(華、鬼、英霊)の用語一連載第2回で「日本軍:12/戦死傷、慰問、勲章・功労」に採録しながら紙面の都合で列挙するだけに終わった一を併せて紹介することとする。紙芝居の多様な用例を判り易くするために、〈英霊〉を祀る〈靖国神社〉の原点、戦死者を受け入れる肉親の姿、そして“死の公共化”ともいべき変容を遂げていく過程を、脚本に沿って見ていきたい。紙幅の関係で紹介作品は各項5点以内とする。

●徴兵と英霊の原点

『大村益次郎:国民皆兵』1942.11、および『兵制の父大村益次郎』1942.11の2作品は、維新政府の兵部大輔として国民皆兵を推進した大村益次郎が、新制度に反対する旧武士浪人に襲撃され右脚切斷・敗血症の重傷を負いながら右大臣三条実美の返書待つ物語である。「上野彰義隊討伐の司令官」であった大村の自説「国のために戦死傷した勇士に対しては招魂社とともに軍事病院を建てなくてはならない」とともに、医師・緒方洪哉が「先生は九段の招魂社の創設に努力されたではございませんか」と死床に伏した大村を激励する姿を描く。刊行年月日は両作品ともに太平洋戦争開戦のほぼ一年後の1942年11月30日(出版者は日本教育画劇、翼賛紙芝居研究会)であり、東京招魂社の創建に関わった大村益次郎に仮託して徴兵制(国民皆兵)の歴史的意義を強調する狙いが顕著である。大政翼賛会宣伝部作『兵制の父大村益次郎』の表紙には、1893(明治26)年に山田顕義内務卿の建議によって日本最初の西洋式銅像として建てられた大村の銅像が、靖国神社の桜を背景に辺り(一説には上野・西郷像の方角)を睥睨するように描かれている。

●無名の英霊と遺家族

『時計は生きてゐる』1941.9では、母一人子一人の時計修繕工が、支那事変が始まってまもなく陸軍歩兵上等兵として出征・戦死し、「(駅頭は黒い喪の凱旋)戦友の胸に抱かれ英霊は今母親のもとに」無言の帰還をする。届いた遺品の日記帳には「お母さん、名誉の戦死を遂げたらこの時計を私だと思ってください」と書かれている。コチコチと動く遺品の時計を見て「倅は生きている、時計は生きている」と思うしかない軍国の母はそのまま多くの遺族の姿でもあった。／南紀州の山村を背景とした『炭焼く妻』1942.1では、夫が出征して3カ月で戦死する。病身の父・3歳の娘・お腹の子供を抱えた妻が



図11 「炭焼く妻」

「(夫の戦死公報を手にして) ああ今は靖国の神としてやがて日本に故国日本に帰ってくるのだ、私はその妻なのだ」と、出征家族・遺族の立場に決して甘えないという自覚を描く。その家先に掲げられる「出征軍人之家」「名誉之家」の表札は、遺家族の沈黙の表象であった。『踏切番と子供達』1943.10は、或る村で踏切番をする老人と村の子供たちの交流を描く。子供たちは、老人が自分の息子を1941年12月8日のシンガポール攻撃・ブキテマ高地で戦死させた境遇に甘えず知らない村に来て働いていることを知り、「お国の為に名誉の戦死をせられた松本曹長の英霊に感謝し黙禱を捧げ」る。模型飛行機の遊びに興じる子どもたちの学校卒業までに残された時間的猶予の少なさが、身近な老人の身上をとおして描かれる。『妻』1943.7は、友人戦死の手紙を受け取った一家の主人が、家族を伴って早速に「砂利を踏む足音さえも心にしみるように昼なお静かな靖国の社」へ詣で、「仇は俺がとってやるぞ、護国の神となった友よ」「おれも後から行くぞ、いま靖国の社前に米英撃滅の誓いを新たに」する。身近な友人の戦死にともなって戦争(徴兵)の現実化を受け入れていく銃後家族の姿が描かれている。

●護国の神(軍神)の称揚

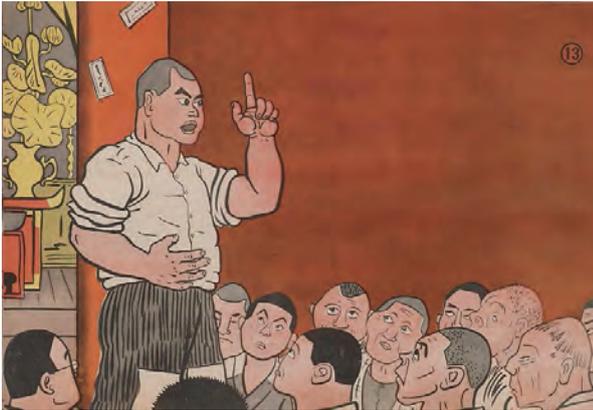
以下の2作品は、近代戦争における無名戦士の死から個人称揚への離陸(その先にある軍神化の一步手前)を示す好例となっている。『忠魂の歌』1942.5に描かれるのは、東京羽田の漁師であった青年が、第二次上海事変中の激戦地で負傷・マラリアに罹患して内地送還された軍事病院で死亡。「ああ三十歳を一期として鈴木庄蔵軍曹は護国の英霊となられた」物語である。具体的な戦場と実名を登場させ、主人公が得意とした和歌が、羽田国民学校の校庭の歌碑に刻まれたことを特記する。遺作の歌「半身は陛下のみたまに捧ぐれどいまだわれに残れる」は、『白衣勇士誠忠歌集』(日本皇道歌会1942)の口絵となっている。『マレーの虎』1942.9は、昭和初期にマレー半島でムスリム盗賊団として活動していたハリマオ(谷豊)の物語。太平洋戦争開戦にあたりマレー半島攻略を第一目標とした日本軍の諜報機関に協力し、特殊作戦で負傷・死亡する前に絶縁状態だった母から届いた手紙が「雨につけ風につけ案じていた豊……どうか立派な働きをして靖国のお社に祀られるようになっておくれ、それがほんとうの孝行です」と描かれる。この特務機関とは、英領インドの対英独立工作を画策して設けられたF機関(参謀本部藤原岩市少佐の頭文字を採る)であるが、本作品では“梶原少佐”となっている。谷豊は軍属ということで戦死扱いされ、ムスリムでありながらも〈靖国神社〉に合祀されたという。

近代戦争が産んだ軍国美談は、新聞報道や軍人の手記などをもとに、流行歌(軍国歌謡)、映画、伝記・小説、浪曲、講談などの題材となり、国定教科書の教材にも使用され、欧米先進国と戦う日本人の精神性を称揚する語りとして定着していった。その中でも英雄的に殉職した軍人は〈軍神〉と呼ばれた。真珠湾への特殊潜航艇による「特別攻撃」で戦死した九軍神の物語として次の2作品がある。『軍神の母』1942.6「昭和十六年十二月八日開戦劈頭、挺身、敵アメリカ主要艦隊をハワイ真珠湾軍港に襲撃し、不滅の戦果を挙げ、身もまた護国の華

と散った特別攻撃隊九軍神の中に上田定兵曹長は輝しきその名を運んでいたのである」。1941年9月発熱した状態で帰省を許された上田が、折しも豪雨に見舞われた故郷の川の氾濫に村人と共ともに働き、高熱が下がらないまま帰隊していった挿話とともに、〈軍神〉を育んだ偉大な母が描かれる。『軍神岩佐中佐』1943.6「(平出大佐による昭和17年3月6日大本営発表)世界平和を使命とする日本の大精神を踏みにじり皇国日本の生命さえも狙わんとした暴戾なるアメリカに破邪顕正の剣を下すに当りまして捨身を以て敵の腹中に飛び込み猛然これに第一誅を加え身もまた護国の花と散った特別攻撃隊の偉業に関し謹んで発表致します」。1941年秋の深夜に突然帰省して父母と交わす「今生の暇乞い」、12月8日開戦の詔勅に「御奉公の時」と瞑目する父、1942年4月8日日比谷公園の海軍葬に列席し「喪主拜礼」で祭壇に進む故海軍中佐・正六位勲六等の母の姿が「その日本の母の清き姿に烈しい感動が満場をゆすぶる」と描かれる。『空の軍神加藤少将』1943.11は、太平洋戦争初期に加藤隼戦闘隊(一式戦闘機「隼」)の戦隊長として活躍した加藤建夫中佐(死後少将)の伝記である。ビルマ・アキャブ飛行場を襲ったイギリス空軍ブレンハイム爆撃機との交戦で被弾、印度洋に突入・自爆を遂げた加藤の戦跡が「我等は加藤少将が護国の神となった聖なる日、(1942年)五月二十二日を忘れる事はできない」と描かれる。『山本五十六元帥』1943.12は、連合艦隊司令長官の数々の戦績・人間性とともに、1943年4月18日西太平洋前線視察での撃墜死が、“海軍甲事件”として約1カ月間公式発表を伏せられた後「昭和十八年五月二十三日偉大なる武人の英霊は東京駅頭に迎えられ」、元帥授与・大勲位叙勲・国葬(6月5日日比谷公園)へと続く1943年前半の3カ月一太平洋戦争の転換期を描く。

●叱咤する集合的英霊

『少年團』1942.1は、先に《明治神宮》の項でも紹介したが、「殊に皆さんに一番ふさわしい又大事な事は護国の英霊或は戦地の兵隊さんの遺家族や留守宅を訪問しお慰めしてあげることです」と、銃後の青少年団の“社会的”役割を強調する。ここで慰霊の対象とされるのは最早「家族の死」ではなく、戦死者の一員となって銃後社会の住民を叱咤する〈英霊〉である。『大空の子』1942.10の作品冒頭の書き出しとなっている「皆さんの中には護国の神として靖国神社に祭られたお父さんをもつておられる方がいると思います」においてもまた、靖国に合祀された“戦死した父の社会化”以後の語り口が、当然のように採用されているだろう。『總意の進軍』1942.3は、大政翼賛会宣伝部が1942年4月30日の“翼賛選挙貫徹のために(副題)”製作した紙芝居である(近藤日出造絵画)。村の集会で「清新強力な翼賛議会の確立こそ刻下の急務」であり、「どうですか皆さんこんなまで、天皇陛下万歳と叫びながら壮烈護国の華と散った忠勇なる幾多の英霊に対して済むと思いませんか。私は断じて申し訳ないと思いません。皆さん英霊は声をあげて泣きますよ。いや英霊に済まないだけ、ではありません。日本を盟主として仰ぎ指導者として慕っている大東亜共栄圏の民族たちはどんなに失望を感じ



図⑫ 「總意の進軍」

ることでしょ」と演説する青年に仮託して、有無を言わせぬ威嚇論法のキーワードとして〈護国の華〉〈英霊〉が躍るように使用されるようになる。

一方、先に「無名の英霊と遺家族」に紹介した『妻』1943.7では、友人戦死の手紙を受け取って靖国に詣でた後出征した夫からの手紙を読みながら、「(日本は戦っているのだ)女の自分は何をしている？ただ目の前の事に追われてうかうかと毎日を過ごしているではないか。女だからといってこれでいいのか。尊い護国の英霊に顔向けができるのか」と銃後の妻としての自覚を深くする場面を描く。監修者・大日本婦人会構成員による「作品解説」は、日本婦人は「つつましく、蔭の力となって黙々と働く比類ない立派さ」を有するが、「家庭さえ守っていればいい時代は過ぎた」「よき妻よき母であると同時に銃後の戦士であることが要求される」「そうして始めて大東亜戦争下の日本婦人たる資格が備わる」と檄する。

太平洋戦争終盤の作品になると、戦場に散った〈英霊〉〈護国の華〉は銃後国民のさらなる精神的団結と生産増強を領導する声として形象化されていく。『神機いたる』1944.11は、大戦末期の台湾沖航空戦(1944年10月12日-10月16日)を背景にした作品である。「(台湾東方で4日に亘って敵機動部隊を追撃、敵艦57隻撃沈とサイパンの仇を討ち)我々一億国民は期せずして宮城を遙拝し……靖国神社の神前に額づいた。勝利の凱歌は上がった……太平洋の防波堤とならんと誓って護国の神となった我が将兵と同胞に感謝の誠を捧げるとともに新たなる誓いを誓い合うのである」。戦勝の大本営発表に続いて10月21日には天皇(大元帥)の勅語まで出され、国民は「アメリカ機動部隊せん滅」の大勝利に沸きかえったが、当時すでに確認されていた戦果誤認の事実は陸軍側にも伝達されなかった。戦時下紙芝居としては末期に属する作品ながら、陸軍省報道部の指導により台湾沖航空戦の1カ月後に刊行されていることに、その報道的役割を見ることができよう。

●靖国神社という近代

〈靖国神社〉は、陸海軍の管轄下にあつて〈伊勢神宮〉と並ぶ明治神権国家の二大宗教的威信の地位を確保していく。しかし、国内戦争から対外戦争のために戦死した者を、階層・出自を問わずに祀る国家的施設として国民的に“認知”されるようになるのは、日清・日露戦争が

きっかけであつたとされる。戊辰戦争・西南戦争の合計とほぼ同数の戦死者を生んだ日清戦争(1894-1895年)後に行われた特別慰霊祭(特祀)において、その大半を占めた戦病死者が初めて慰霊の対象となった。本格的な近代戦であつた日露戦争(1904-1905年)の戦死者は、「当時の兵役適齢人口100人につき13人に及び、日露戦争後に靖国神社が国民統合の精神的中枢として大きな役割を果たすようになった」という(大江志乃夫『靖国神社』岩波新書1984.3.21、p128)。また、「日露戦争を境に、それまで忠魂、忠霊などと呼ばれていた戦没者の霊を英霊と呼ぶことが一般化し、没個性的な護国の英霊として抽象化され美化されるようになった」(村上重良『祭祀と慰霊』岩波新書1974.9.28、p154)。

その一方で、「日露戦争段階で戦場に馳駆した第一線の初級将校や下士卒の念頭には、戦死することが靖国神社に結び付くような思考はほとんどなかった」(大江・前掲書、p124)との指摘もあり、皇軍兵士を〈英霊〉と呼ぶ国民的物語が紡がれ定着していくには、明治末期から昭和初期にかけて約20年余の時間を要したものと考えられる。世界最強と考えられていたロシアに対する“勝利”によって、対外的には世界の一等国としての帝国主義的積極熱が生み出される一方、国内的には明治憲法国家のさらなる政治的・精神的再統合への道が踏み出されることとなる。前者は「帝国国防方針」(1907年4月)にもとづく満蒙権益の確保(韓国併合、対華21か条要求)、陸海軍の整備強化であり、後者は講和条件への不満に端を発した「日比谷焼打事件」(1905年9月)から「普通選挙法」(1925年5月公布)に至る徴兵負担と政治参加に対する国民的平等要求を巡っての政治過程に対応している。殊に普通選挙とほぼ同時に公布された「治安維持法」による“国体変革・私有財産制度の否認の厳罰化”は、言論の自由と大衆運動を恣意的に制限する国家権力の増大化をもたらす決定的な転回点をなしている。

それと同時に、この時期に内務省・陸軍・文部省が一体となって国民諸階層の組織化が進められたことに注目する必要がある。内務省におけるそれは、1901(明治34)年2月に創立された「愛国婦人会」の一般婦人への組織的拡張であり、1908(明治41)年戊申申請書発布とともに展開された官制地方改良運動、およびそのイデオロギー的主軸となる「日本報徳会」の組織化である。内務省はまた戦後経営の一環として、1916(大正5)年中央報徳会を母体に青年団中央部を設立するなど農村社会の資本主義化に伴い明治中期には崩壊寸前にあつた若者組の近代的脱皮を図り、文部省も補習教育の観点から青年団体の再組織化に協力し、大正末期(1925年)には官製の全国組織「大日本連合青年団」が完成した。陸軍は、1910(明治43)年11月「帝国在郷軍人会」を創設し、日露戦争後に増大した予備兵の戦闘技能の維持・温存を図るとともに、青年訓練所の訓練幫助・青少年団の指導協力をとおして入営前の初歩的な軍事教育を担わせるようになった。

こうした国民諸階層の組織化の中でも、草の根からの国民教化という点で特筆すべきは、日露戦争後の国民教育の整備・拡充の政策と密接な関連をもつ義務教育の改革—1907(明治40)年、第5次小学校令による義務教



図⑬ 「父」



図⑭ 写真週報 1943年5月5日号「息子の英霊を訪ねる両親」

育年限の2年延長、および小学校教科書の国定化（開始は1903〔明治36〕年からと時間的には前後する）と相次ぐ改訂である。戦前の小学校教科書は、検定制度のもとにあっても、各種の「軍国美談」一日清戦争の“木口ラッパ兵”“水兵の母”、日露戦争の“乃木希典”“広瀬武夫”“橘周太”“一太郎やあい”一を教材としていたが、さらに第2期国定教科書の『尋常小学修身書 卷四』（1911〔明治44〕年使用開始）から、「第一 天皇陛下」「第二 能久親王」「第三 忠君愛国」に続けて「第四 靖国神社」の記述を登場させるようになる（これは以後の改訂においても継続される）。その記述は次のようである—「東京の九段坂の上に、大きな青銅の鳥居が、高く立っています。その奥に、りっぱな社（やしろ）が見えます。それが靖国神社です。／靖国神社には、君のため国のためにつくしてなくなった、たくさんの忠義な人びとが、おまつりしてあります。（略）／私たちの郷土にも、護国神社があって、戦死した人々がまつられています。／私たちは、天皇陛下の御恵みのほどをありがたく思ふともに、ここにまつられてある人々の忠義にならって君のため国のためにつくさなければなりません」。戦死者を祀る地方の神社の頂点に位置づけられた〈靖国神社〉の壮かさ・静謐さが強調され、国のために命を捧げる行為を忠君愛国の極限形として美化し、天皇陛下の恵恩を「ありがたく」受容「しなければなりません」という叙述と命令の主体なき文体（軟化された勅語調とも、勅語の口語化ともいべき文体）が、その比類なき特徴である。

国策紙芝居の脚本が、国定教科書の記述の大いなる影響下に生み出されているであろうことは、本稿連載第6回でも指摘したところである。たとえば次の2作品—『父』1942.08は、過労で盲目となった父が戦死した息子を迎え「いとしい夫、我が子、今ぞ護国の神となる、莊嚴の氣満る靖国の杜」「そちこちに起るすすり泣き嗚咽柏手の音、いとしい夫我が子今ぞ護国の神となる」と「或る年の九月招魂の式典」に出席する姿を描く。「名誉の戦死」を告げる戦死公報に続き「無言の帰還」をした肉親が、村葬・町葬から国家的葬儀へ、莊嚴なる〈靖国神社〉の集合的〈英霊〉の合祀へと昇華されていく過程を受け入れるしかなかった「誉れの家」の叙述は、悲しむことを許されない（国家によって涙を禁じられた）昭和期国民の姿である。／また『雛鷺の母』1944.11は、孫を博士にしたいと願っている老人が、少年飛行兵を志願する孫の固い決意と教師の説得を受け入れ「（その母親に）墓も長い歲月には線香をあげる人もいなくなってしまうが、飛行兵になって戦死しようともお天道様のある限り靖国神社に祀られて畏くも天皇陛下が御親拝遊ばされる」と述懐するに至る。この作品は、家族（墓）の存続さえも国家的慰霊の場への奉祀によって代位されることを願うに至る“或る種の観念的衰弱や退廃”をさ感じさせるであろう。

日清・日露戦争以降、〈靖国神社〉が果たしてきた現人神・天皇が参拝する施設に「神」として合祀される栄誉によって遺族の不満や厭戦気分を抑えるという政治的効果の裏面を、国策紙芝居は端無くも描き出している。紙芝居そのものが有する演劇性は、国策への過剰な同調を基調にしなが、様々な境遇の観客による“作品の受容”を戦時下においても可能にしたのである。紙芝居作品が描く出征家族の表象—「遺品を抱きしめる母」「社会化された死」「沈黙に沈む家」、これに先立って「振られる日の丸の小旗」が、現実の場面で型どおりに登場し始めたとき、それは、近代日本社会の基層を成していた家族が「哀切な大衆の〈家〉そのものの全重量と水準とを国家の規範力に同化させようとする悲劇性」を意味していた（吉本隆明「情況とはなにかVI」『自立の思想的拠点』徳間書店1966.10.20、p152）。そして、その時代とは、「（子孫の追慕、家名の保持、供養の永続、死後の共生といった）日本人古来の念願をほかならぬその時代性においてあやまず把握し、これを踏まえて未成熟な国民意識のなかから国家防衛の意志を造出した靖国神社の政策」（神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店1961.2.2、p315）が推し進められた果てに行きついた時代であった。国策紙芝居はその時代性と演劇性によって、日本近代の仄暗い基層に計らずも自らの位置を留めてきたということができよう。国定教科書と国策紙芝居（その文体・言説）の親縁性については、次回に紹介する〔国内社会：14/国史〕において、あらためて言及する予定である。

（続）